
M.I.S.s. ~ 魔法バカの六人 ~

にゃあプー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M・I・S・S ～魔法バカの六人～

【Nコード】

N8718X

【作者名】

にゃあプー

【あらすじ】

主人公、小橋悠斗は兄が突然消息を絶つたの事を心配していた。だがその兄が消えた場所が問題だった。空に浮かぶ人工の島、通称《天空島》。そこにある地球側で唯一の魔法学院での出来事だった。入国審査が厳しい天空島に入ることができなかった悠斗に、ある日魔法学院から入学願書が届いた。

プロローグ（前書き）

まだまだ文章を書くのは下手くそですが、構わず出します。主人公は強い予定ですが最強じゃないかも…

プロローグ

青い海の上空に浮かぶ島。

直径およそ5キロに及ぶ都市築かれ、外周部には作物を作る農場や人工湖などが存在する。

都市の道路は石畳であり、建物もビルなどではなく西洋の建物を真似て作られ、そして環境整えるため様々な機械が10層まで作られた地下に設置されている。

地球側で唯一の魔法学院があり、科学と魔法の融合でできた次元演算システム結晶『MOTHER』が管理している情報局がある島でもある。

島の名は《天空島》

そこは世界中の人が知っている、この世界と異世界を繋ぐ唯一の場所。

《異世界の門》が存在する場所でもある。

天空島、地下第6層。

「なあ、シャル。この状況何時まで続くと思う？」

今のこの状況に飽き飽きしてきた俺は、俺の前方にいる金髪の女性に話しを振る。

「そんなの知らないわよ！そんなことは気にする時間があるなら、あんたも目の前のガーディアンを潰しなさい！あーもう、次から次へと出てくんじゃないわよ！」

シャルこと、あるグループに選ばれた数少ないメンバーの一人である。俺も一応そのメンバーの一人である。

俺たちは地下6層にある天井、壁、床が黒い結晶で出来た一本の通路上で戦っている。一体たりとも後ろへは通さないようにするために……

俺たちの目の前には無数の二足歩行マシン、奥にある重要な物を守るための侵入者迎撃機械、通称『ガーディアン』が俺達の通路の先から続々と出てきている。

ガーディアンは人間をモデルに作られた機械であり、体長は小さいが頭、胴、足等々作られている。しかし手だけが筒のようになつており、そこから魔力弾 属性などない魔力の塊 を発射して敵を排除する。

俺達には魔法障壁をつくり出せるから、一発一発はたいした威力ではないが…なんせ数が多い。俺達の魔力も無限じゃないので持久戦になると危険である。

「やばいんじゃないの?」コレ

「それさつきも聞いた!リリー達が解析して何とかしてるから、それまでよ。あんたは、つべこべ言わず私を手伝えばいいのよ!」

「……へいへい」

彼女はそう喋りながらも、長い髪を揺らし氷作つた巨大な槍を振り回してガーディアンを撃破し続けている。

彼女の補佐をしている水の精霊獣ワルジョビも無数の氷の玉を空中に出現させ、マシンガンのごとく撃ち出してシャルが砕き損ねたガーディアンを粉々にしている。

ちなみにワルジョビはシャルのパートナー、見た目は水で出来た大型の狼の精霊。

俺もやりますか・・・俺は弓を構え、そこに3本の小さな火の矢を出現させ、その先を鋭く尖らせる。狙うはガーディアンの胸。

ガーディアンを動力源は胸のところにある魔法核、ココさえ打ち抜けばガーディアンは動かなくなる。だが魔法核は手のひらより小さく狙うのは難しい、なのでシャルのように近接で壊すほうが無難である。

だが相手は機械である、多少壊しても動く。

倒したと思っていたガーディアンがまだ動き、変な方向からの攻撃を受ける可能性がある。まあソレをさせないためにフルジョビは粉々にして壊しているんだと思うが・・・

俺は小さなころから射撃だけは得意、この距離ならならガーディアンの小さな核を狙うことはできる。だが俺ができるのはそのくらいなわけで・・・

「飛炎、ちょっと力貸してくれ。」

俺はそう言つて3体に向けて同時に炎の矢を放つ。その矢はみるみる巨大になり、まるで吸い込まれるかのごとく3体のガーディアンの胸にあった魔法核を撃ち砕き、そのまま勢いを止めず方向を変え、他のガーディアンの核まで貫いていく。3本の矢で約10体のガーディアンを停止させた。

俺の相棒の精霊獣が飛炎。

飛炎は炎のできた鷹くらいの鳥と言つていいだろう。現在俺の頭にとまっているが熱くはないし髪も燃えない。

飛炎は尻尾が超長い、俺の頭にとまっているにもかかわらず尻尾の先は地面についてしまっているほどである。

コイツは一人でも？いや違つたな...1羽でも魔法使つたり、炎を

吐いたり、その辺りを燃やして倒すことなど造作もないはずなんですが、誰に似たんだか大抵やらない。俺が言う事もしたり、しなかったり。

そんでもって、して欲しくない時に限って炎を吐いたりする。特に周りに油とかよく燃えそうな物があるときに限って、狙ってやってないか？ってくらい、炎をまき散らす。そして炎上したら自分は関係ありません、とどこかに飛んでいってしまう。どんだけ俺が怒られたことやら・・・

普段は俺の肩やら頭の上に止まり居座り続ける。まるで置物になったかのごとくピクリとも動かないときだっただけであるのに。

まあそんなことはどうでもいい、飛炎でも流石に戦闘中だったら手伝うことぐらいはしてくれ。もちろん自分は定位置から動かない。鳥の姿をしているだけあって目が物凄く良く、射撃の能力が高いみたいである。

おっと少しの時間思考していたら、シャルが討伐し損ねた3体のガーディアンが俺に向かってきている。

「んじゃもう1回頼むぜ、飛炎」

先の同じように1本炎の矢を作り放つ。しかし矢は今度は巨大にならず1体の核を貫いただけで止まる。

「おい！飛炎！」

俺の頭に視線を向けると、飛炎は横を向いて完全にやる気なし。

そんなことしている合間にも2体のガーディアンは俺に近づいてきている。

こういつ時くらいは言うこと聞いてくれよ！いくら障壁で防げられていても、2体から連発で撃たれたらかなり痛いんだぞ！と相棒を心の中で愚痴りながらも前方に障壁を張り、ガーディアンの魔力弾に備える。

ガーディアンの銃口に魔力が溜まり、今まさに放たれる。

と思つた瞬間、突然ガーディアンの頭上から巨大な氷の柱が降り注いで2体のガーディアンが潰されていた。

「バツカじゃないの？あんだ！なんでも感でも精霊に任せすぎよ！たまには自分でやりなさいよね！」

いつの間にかシャルが俺の近くまでやってきてきた。

「別に良いじゃねえかよ！そんなお前だって、少しは制御しろよな！完全にオーバーキルだろ。てかさつきから手を抜いてるだろ！ガーディアンの撃ち漏らし数が増えたぞ。もしかしてその程度しかできないのか？威力の強い魔法しか撃てないくせに、その程度だったのか・・・使えないやつ」

シャルは顔をうつむきながら体をプルプルと震わしている。

よし！この感じならあともう一押しか？こいつは『使えないやつ』とか『出来損ない』というような言葉には超沸点が低い。あとはこのイライラをあゝのガーディアンに向けてくれればよし。珍しく今は飛炎が前に出てガーディアンの上から炎の雨を降らせて食い止めてくれている。

「できないなら仕方ないな、俺も手伝つて倒してやるぜ」

俺がそう言つとシャルは震えをピタツと止め

「貴方の手伝いなんていらんわ！一人でやってやるうじやないの

！そこで見てなさい。この私がこの程度じゃないことを見せてあげるわ！！！」

そう叫ぶと、シャルはガーディアンを抑えていたワルジヨビのとまで行き、一言二言しゃべると少し後ろにさがった。主人を守っているワルジヨビに、俺は一瞬睨まれた感じがしたが、まあ気にしない。

彼女がこの程度じゃないことはよく知ってる。彼女の巨大な魔法はもう何度も見てるし、この程度なら一瞬で屠れる力があることは分かっている。

ここはシャルに任せて俺は休憩でもしてますかね。通路の壁に寄りかかり座ると飛炎がもどってきた。

こいつも俺の近くで休憩するみたいだ。

壁に背を預けながら、一度シャルのほうを見ると、手には2対の青い刀身の剣を握っていた。

・・・シャルの奴、マジモードじゃねえか。まあこれで本当に俺は何もしなくいいな。シャルが全部片付けてくれるだろう。

俺は目をつぶり何でこんなことになったのか思い出してみることにした。

日常（前書き）

まだまだ拙い文章ですが・・・ヒロイン候補投入。さてどうなるやら...

日常

10年前突如、太平洋上空に巨大な門が出現。後に《異界への門》と呼ばれる、青い特殊な金属でできた両開きの門が出現したのである。

門からの距離が、1番近いこともあって日本に調査本部が置かれ、門を調べ始めるが…太平洋上空1000mに柱も何もなく浮いている門を調べるのは困難であり、調査は難航した。

それでも調査団は何とか調べあげ、使われている金属は地球に存在しない物であり、さらに門を開けようとも試みるが失敗が続いた。だが出現してちょうど1年経過した4月4日に、門は突然開いた。

「門の奥には何処かの森の中に繋がっており、沢山の様々な人種が待ち構えていたという。」

当時の調査団長のロビン・アウストが異世界人との最初の交渉にあたり、なんとか闘争へは防げたと言われている。これを評してロビン・アウストには地球平和賞が送られた。

ロビン・アウストは試験にでるから覚えておけよ。現代史に置いたの超重要人物だから、今でも覚えて当たり前くらい的人物だから必ず覚えるように…今日はここまで」

先日担任の先生がこのように言っていたが、今、この世界は異世界の門の開通により劇的に変化している。

亜人という未知なる種族との交流！

そして地球とは全く異なる生物が住む世界！

さらに魔法という名の新たなるエネルギー！

全てが同時に発表され、両方の最先端に行くのが太平洋に浮かぶ門と繋がるように作られた都市、天空島。

俺、小橋悠斗こはしゆうとはそんな天空島へ行く方法を探っていた。

成績は下から数えたほうが早いし、スポーツも特別できるわけでもない。しいて言えば弓道をやっていたせいか、手裏剣や消しゴムやチョークなどの、飛び道具を的のど真ん中に当てる、ちょっとした特技があるだけ。特に消しゴム、丸めた紙などを授業中友人に当てるのは超得意。

弓道をやっていたので学園の弓道部に誘われたが、あの静けさはどうにも居心地が悪く、幽霊部員である。

そんな俺が天空島に行きたい理由は、かつて俺の…

「ユー…!!…ユー君！」

俺の身体が地震のごとく揺れ、考え事を無理矢理中断させられた。

「何だよ、蓮華れんか。考え事してたのによー」

俺に地震を体験させたのは、横をいつもピツタリついて歩いて帰る、腐れ縁でありながら幼馴染のお隣りさん、大倉蓮華おおくられんか。

「だってもう家の前だよ。そのまんま歩いて行きそうな勢いだったし。」

「あっホントだ、いつの間に…」

ちょっと思いにふけていたら自分の家まで帰ってきていたようだ。

「まあいつもユ一君は、お義兄さんのこと考えてる時は周り見えてないよね。今回もお義兄さんのこと考えてたんじゃないの？」

「・・・まあ、なくもないかも。そして蓮華よ、いつも言ってることだが、俺の兄貴を『お義兄さん』と呼ぶのはやめないか？」

「なんで??? お義兄さんになる人を、今からお義兄さんって呼ぶ練習してたら駄目かな？」

そう、蓮華にまた新たな称号が付きそうなのである。

婚約者、嫁、妻。こんなのが付きそうなのである。

先日俺の母親が

「あんた婿に行きなさいね。」とのたまった。

何をいきなり！と返すと

「蓮華ちゃんとあんたの結婚の話よ。こっちは優一もいるし何にも問題ないから、大人しくあっちの家に婿に行きなさい。」

「もし嫌だとか言ったら？」

「そうね、法律で問題ない外国にいつて次の日に結婚式ね。私は譲歩してあげてるのよ、あんたが蓮華ちゃんと結婚してもいいと思える日まで、できるだけ待っててあげるんだから」

もう突発的なことが起きない限り、決定事項みたいな感じである。その原因も何となく分かる。

大倉蓮華、身長は俺より低い、肩まで延びる髪がいつもサラサラしていて、たまにオレンジみたいな匂いが漂ってきたりして・・・まあ腐れ縁のひいき目かも知れないが顔は可愛いとは思う、胸は残念だが…。さらに勉強は優秀であり、運動神経もよく、明るく人気者である。だがひそかに恐れられてる人物でもある。

俺に近づく人に対してだけは異常な人物になる。

俺とちよつと話していた女子に蓮華が冷え切った視線　特に巨乳の場合　を送ってるのを、俺は何度も見たことがある。それを俺が見ているのが分かると、さっきのは錯覚だと思っほどいっもの明るい蓮華に戻ってたりする。

次の日、その女子は欠席なんてことがあつたりする。偶然だと思いたい…

さらに蓮華は学園長の娘だったり、大手企業の会長の孫だったり、生徒1人くらい行方不明にできそうなくらい権力がある。蓮華の両親は娘を超溺愛してるからなく、蓮華の頼み事ならやりかねない。

俺が今の学園にいるのも、多分蓮華のせいである。

担任が面談で、君の受ける学園はここだね、って進路に書いてもない学園を語りだしたり。

両親もこの学園だけは確実に受ける！とか言い出したり。

これは偶然かも知れないがその学園以外全て落ちた、確実に入れると思っていた安全圏のときまで。

「どうしたの？私の顔なんかジッと見つめて。なんか顔に付いてる？なら早く言って！そんな風に見つめ続けられると流石に照れるよ」

「…悪い。顔には何もついてない。ちよつと考え事してただけだ。

…じゃまた明日な。」

蓮華にそう告げた時、ふと誰かに見られているような気がした。

周りを見渡すと、道路の先に人が立っており、俺のほうを見つめていた。その人物は背中には大きな・・・剣？を背負っており、身体にも鎧などしていた。

誰だ？知り合いか？それとも単なる西洋鎧のコスプレ野郎か？俺がよく見ようと目を凝らすと、その人物は忽然と姿が消えた。

む……。

目を擦ってもう一度見るが…いない。

見間違いだったか？でも確かに人がいた気が…

いくら考えてもどうにもならないので、人影は俺の勘違いだったということにした。

家の前で蓮華と別れ、玄関で靴を脱いで家にあがったのと同時に、ピンポン！と呼び鈴が家の中に響き、俺宛てに市橋祐子いちばしゆうこって人物から段ボールの荷物が届いた。

誰だっけ？市橋祐子って…

自分の部屋で中を開けると分厚い本やらカード、封筒、それにナイフや数種類の草、そして緑の液体が入った瓶まで出てくる。

誰が何でこんなもの送って来たんだ？

送ってきた場所を見ると天空島4ー59、ルナ331とあった。

日常（後書き）

誤字脱字、あるかもしれませんが。感想&アドバイスなどありましたらジャンジャンどうぞ。お待ちしております。

送られてきた物（前書き）

前の2話にくらべて、多少長くなりました。ギリギリ間に合ってたよ
かった。

送られてきた物

てんくうじまあああ？！

何で天空島から？天空島で俺と関わりのある人物というと・・・まさか兄貴か！？

そうなると市橋祐子って名前は、ひらがなにすると《いちばしゆうこ》。これを少し並び変えて《こばしゆういち》。やっぱり兄貴からだ。でもなんで偽名で…

小橋優一こはしゆういちは俺と3つ歳がはなれた兄である。

3才でヴァイオリンを習い、5才でコンクールで1位をとりエリートコースが待ってると思われたが、突然辞めた。

小学校にあがるとサッカークラブに入り、FWでスタメンとなり、その年のMVPと得点王に輝き、そのまま中学も続けるのかと思いきや、またしても辞めた。

中学になると、今度は美術部へと転向し、風景画を描き金賞。審査員からは『君の絵は人々に感動を与える絵だ』と言わせるほどだったらしい。そしてまたしても辞める。

そして武道に通い始める。剣道・柔道・空手、それぞれ習い数週間て年上をバツバツと倒していった。

もちろん学業も優秀。兄貴自身は決して認めないが、兄貴は『天才』という人種だ。

兄貴自身が言うには「俺は多少器用なだけで運動でも芸術にでもその事に特化した才能がある奴には勝てねえ」とのこと。器用ってレベルじゃないと思うけどな。

そんな兄貴に2年前、突如天空島にある魔法学院からの入学願書が届き、兄貴は受験し見事合格して天空島へと一人行ってしまった。1年目は何かと連絡をくれたがあるころからピタリと連絡がこなく

なった。

両親は兄貴が子供のころからしつかりしていて、連絡がこないのはただ単に忙しいのだろうと、特別心配はしている様子は見られない。

だが俺自身は妙な感じがして、兄貴に何かあったのではと思う。

あれから天空島のことを独自で調べたが…内部情報は極端に少なく兄貴のことは全く分からなかった。

そんな時に天空島から兄貴が偽名で奇妙な物を送ってきた。

やっぱり兄貴が何かに巻き込まれて、密かに送ってきた物と考えるのが普通だろう。そう考えて中身を見ると本は魔法の本、草は何かの調合に使う材料で、瓶の液体は魔法薬って奴ではないのか？そしてナイフは護身用、カードは………浮かばないが何かあるのだろう。

A4の茶封筒に何か書いてあるかもしれないが、今は一旦全部出してダンボールを片付けないと…俺の部屋が狭すぎる。

なぜコレを送ってきたとか、兄貴はどうしてるとか今考えても思いつかないので、とりあえずダンボールみたいな箱をたたもうとしたり、

「ん？この箱底に板が入ってるのか…」

極薄の板が底に挟まっているのに気付く。

この板、ダンボールみたいな底に見えるよう絵が描かれている、見ただけではほぼ見つけることができないほど、精密に立体的に描いてある。俺が中身を全部出してたたもうと思わなければ気づけなかったほどである。

ここまでカモフラージュしてあるってことは…

何とか底から板を外すと中から一通の白い小さい封筒がでてきた。白い封筒にはDear my brotherと書かれており、透かしてみると何枚か紙が入っているようである。

ダンボールは俺宛だったから、多分コレも俺に宛た物だろうと思う。何故英語？と思うが…もしかして俺が知らないだけで、他に兄弟とかいたりするのだろうか？

しかし偽名まで使ってさらに隠してまで送ってくる物…なんか嫌な予感。どっかの極秘書類とかで命狙われるとかだったら、開けたくないよな。

でも開けないことにはどうにもならないし　　だが開ける前にダンボールを片付けないと、俺が動けなくなる。

ダンボールを片付けて、ある程度整理してからベツトに腰掛けながら白い封筒をあけると、中から手紙が二通でてきた。

兄貴の状況でも書いてあればいいんだが…んー何々？

『悠斗へ、生きてるか？死んでたらスマン。』

聴きたくない言葉がいきなり出たよ！

『この手紙がお前に届く時、俺はまだ生きてる。と思う、多分。』

あっち行って何やらかしたんだよ！兄貴！

『まあちよつと失敗してな。悠斗、お前が生きてるなら近いうちに面倒なことが起こると思う。そのため…』

カタッ

……………今、何か音しなかったか？それも結構近くから。

周りを見渡すが俺の部屋に誰かいるはずもなく。動物とかいるわけでもない。

気のせいか…最近多い気がするな、俺神経質になってんのかな。

『お前が生きてるなら近いうちに面倒なことが起こると思う。そのためにおま…』

ガタツ、ボスン

…やっぱり気のせいじゃなかった。机の上に置いておいたはずの送られてきた本が今は床に落ちている。さっきの音は机から本が落ちた音だ。

兄貴よ…近いうちについて言うより、もう面倒なことが起こって気がする、目の前で。

そのまま様子を伺っていると、床に落ちている本が自動的に開き、パラパラとページを勝手にめくっていく。そしてちょうど半分あたりで止まった。

そして開いたページに書いてある文字が、紙の上を動き出し中央に集まり始める。そして本の中央には黒い円が出現していた。

だがそこで止まった。俺はしばらく様子を伺っていたが、その後コレといった動きはしなかった。

あら？魔法が発動するのかと思ってたが、違ったのか。それとも不発か？ふう〜脅かしやがって。爆発とかするんじゃないかと思っ
てビクビクしてたのがバカじゃねえか！

そうしてベットから立ち上がった　　その時、俺に向かって黒い物体が飛び出してきた。

とっさに避け、近くに置いてあったナイフを即座に取り、投げつける。

飛び出してきた生物、巨大な口と牙を持った体長50cmの真っ黒なイモムシは、狙い通り頭らしき場所にナイフが刺さっており、霧散して跡形もなく消えた。

だが喰われた。

俺の指のほんのわずか先と、手に持っていた兄貴からの手紙が、本から飛び出してきた黒いイモムシに食われた。避けてなきゃ腕こ

と持っていていかれてたコースだけだな。

「くそっ！狙いは兄貴からの手紙か！」

三角形になつた手紙の端しかもう残っていなかった。

親父の勧めの道場に兄貴と一緒に通わされていたし、兄貴の武術の相手にされていたので、今回はなんとかなつたけど…。

この怪しげな本同様に、茶封筒や中に入っていたものを部屋の片隅に、慎重に移動させて置いておく。

くそ、兄貴の手紙には何か重要なことでも書いてあつたのか？さっきのは魔物だよな、毎回こんなだとやっつけられないぞ、一体兄貴は何に狙われてんだよ…

「ふあゝあ、ねみいい」

流石に外が明るくなりかけるまで起きてると眠いな。やはり本は魔道書であつたみたいだが、その後は何もなかった。背表紙に異世界の文化の言葉か、分からない単語が混じり、詳しくは解析はできなかつたが、あつちの世界のものだろうし魔物が飛び出してくるくらいだし魔道書だろう。

まあ魔法には魔力というエネルギーが必要ということだけは分かっているし、下手に扱わなければ大丈夫だろ。

今日の学園に行く準備をして、

「おはよう母さん。朝飯何？」

テレビを見ている母親は振り向きもせず、テーブルを指す。

母親は朝のテレビの占いを見るのが趣味？である。1月から12

月まで漏らさず見て、さらに占いをやっている他局のまで全てみるのが日課だ。時にはメモする時もある。その時間帯だけはテレビの前から全く動こうとしない母親。

テーブルにすでに用意されていた朝食を食べ始める。

目の前には親父が食べたと思われる食器がまだ置かれていた。

てか親父帰ってきたか？

朝まで起きていたが、帰ってきた音とか聞いてないんだが……

朝帰ってきてまた行ったのか？朝帰り、なんとまあ……

そんなことを考えながら朝食を終えて、家を出ると毎朝のことではあるが家の前に蓮華が待っていた。

「ユー君、おっはよ。なんか眠そうだね？面白い本でも見つかったの？」

あの本を面白い本って言うてもいいんだろっか？、

「おはよ蓮華。まあ興味深い本を夜中まで見ていたな。しかしよく分かったな」

「そりゃ分かるよ、ユー君のことだもん。予想だけとお義兄さんから荷物が届いて、その中にユー君が読みたくなる分厚い本があったんじゃない？」

「……ああ、そんなとこだ。」

あんた犯人じゃないよね？……いや、蓮華の場合だと俺ん家に隠しカメラでも設置されてるほうが可能性が高いか、俺にプライベートスペースは存在しないのか！

今は証拠がないしな、今度徹底的に部屋の掃除してみるか。

「先生、天空島の学院に行きたいのですが、願書とか入手できません

んか？」

俺は昼食を高速で腹に入れ、職員室にいる担任の先生に質問しにいった。

昨日のダンボールには兄貴が生きてる可能性あるっただけで、ほぼ分からないままである。あの手紙に書いてあったかもしれないが、喰われてしまったし確認の仕様がなない。

茶封筒ほうには何か書いてあるかも知れないが…保留。

やっぱり自分自身の眼で兄貴の状況を確認めたい。

そのためには兄貴と同じ魔法学院に入るのが手っ取り早いと考えての、さっきの質問である。

「とうとう今年も現れやがったか…毎年何人かいるんだよね、魔法学院行きたいって言う生徒が。それが小橋が最初とは思わなかったが、簡単に言う…無理だ。」

「先生、結論が早いですね。でもそこを何とかできないでしょうか？お願いします。」

頭を下げて担任に頼みこむ。

「何とかできるとかの次元じゃない。天空島の情報は何処の『国』も欲しがってるし、魔法学院の願書はどういう基準かわからんが、生徒個人に送られてくる。さらに魔法学院の願書一枚なんてオークションで『33億円』とか値段ついてんだぞ。学園の一担任にどうにかできるわけがない。頼む相手が違うんじゃないのか？小橋なら適任の奴がいるだろ。」

俺もオークションの話は知っていたが、現代史の先生なら知らないコネでもあるかと、薄い望みを賭けたんだがやっぱり無理か。

俺も蓮華に頼むほうが可能性は高いのは分かるが…とんでもない条件とか突き付けられそうだしな…蓮華の場合。

「ああそうだ言い忘れてた。小橋、お前は魔法学院のことは忘れてエスカレーター式に学園の高等部へ行けよ。下手すると俺のクビが飛ぶのでな。」

やっぱりこの担任にも圧力がかかっていたか…

送られてきた物（後書き）

戦闘ムズイ。手こずりました。誤字脱字、アドバイスなどありましてらドシドシごつぞ。

試験（前書き）

挑戦してみた。今回は自分の中では異質な書き方…

試験

「ねえ、ユー君。ちょっと小耳にはんさんだ事なんだけどね。ユー君はまだ魔法学院受験するつもりでいるの？」

担任に質問した日の放課後に蓮華が俺に質問してきた。

情報早いつすね蓮華さん。何処からソノ話が耳に入るんだか・・・まあほぼ確定で担任だろうが、ちよつと権力に屈っしすぎじゃないか？

「まあな。兄貴がどうしてるか確認するのに1番手っ取り早いそうだしな。まあ現状無理だが」

「ふん。なら私がお父様に頼んでみようか？何とかなるかも知れないよ？」

「...いや遠慮しとく。流石に33億円する物を、泰蔵おじさんに頼むのは違う気がするし。」

「そつかあ、33億円かあ、たったそれだけなら私だけでも何とでもなるね。ならユー君、私にお願いして、『私と結婚してください』って言うてくれたら、今すぐにも叶えてあげる。さあ、ほら、早くう』」

33億円は、たったそれだけとは言わねえよ。宝くじ1等前後賞を十一回当てないと届かない代物なんだぞ！それだけあつたら家を豪邸にできるな。

そして絶対言わないからな。言ったら最後だ、10代で家族が増えるのは勘弁してくれ。

蓮華の願いはいつものことだが、金銭感覚もおかしいのは知っていたハズなんだが、ファーストフードやファミレスなどを、普通

に使ったりして普段が庶民的な感じだからだろうか、毎回ちょっと驚く。俺もそろそろ学習しろよなって思っているんだが…

「絶、对、言わない。お願いは置いといて、33億円も借金してまで行きたい所じゃないし、33億円なんて返せる気がしねえ。」

魔法学院卒はかなりの高待遇になるので、返せる可能性もありえるのだが…蓮華だからこそ断る。受けるとどこからか『チーン、南無』って聞こえてきそうだし。

その後の尋問とかはなく、平和な帰宅となった。

やっぱり兄貴の状況を知るには茶封筒を開けるべきか。

自分の部屋へ着き、部屋の片隅においてある封筒を引っ張り出して…その前に掃除、掃除。

本棚の上、棚の中、ベット、押し入れ、コンセント、天井、扉、机、椅子を調べ…もとい掃除して、大量にでてきた盗ちよじやなくてゴミはゴミ箱に捨て、ゴミ箱を部屋の外にだして綺麗にしてから、静かに封筒を開ける。もちろん撃退の準備もして。

茶封筒からは魔物とかは出ず、普通に数枚の紙が出てきた。それは手紙とかではなく、天空島の魔法学院の願書であった。

33億円！まず最初に頭に浮かんだのは兄貴のことでもなく、魔法のことでもなく、札束で埋まってる風呂が浮かんだ。ウヒよヒヨヒよヒヨ。

売れば一生適当に生きれるんじゃないか？1日82万円使っても1年間で3億円。

高級ステーキを食って、車買って、世界一周旅行行って…

色々妄想して、自分の老後辺りまで考えた所で現実に戻ってきた。

ふうー長旅だった。

しかしどうするこの願書。本当に売るか？でも兄貴が偽名まで使って送って来た物、売ってはいけない気もする。

俺が天空島に行ける最後の切符と言っていていいだろう。普通なら兄貴はあと数年を過ぎれば帰ってくる予定だが、兄貴と会える可能性が、この機会を逃すと一生なくなる予感がひしひしとする。

試験に受かるか、どうかもわからん学力なのだが、受けてみないことにはソコはわからない。

マグレで受かる可能性だってあるだろ！

しかし受けるのは良いのだが…問題点は蓮華だな。

俺が魔法学院願書を手に入れたと知ると、確実に何処からか願書を手に入れて、同じく受験してくることが容易に想像ができる。

そのままあつちまで蓮華が憑いてきそうだし、それだと危険なことには巻き込まれそう。昨日みたく魔物に襲われることだってあるだろう。アレでも俺の幼馴染だ、蓮華には危険な目にあって欲しくない。

願書は締め切りギリギリまで出さないことにしよう、両親も蓮華とグルだから、親にも内緒だ。蓮華が間に合わない、と判断できたところで両親には話そう。

それから数カ月俺は守り通し、密かに願書をだした。

試験当日。黙って期限ギリギリにわざと出したのに、蓮華と一緒に会場へとむかうこととなった。何故かって？それはバレバレだったわけだよ。蓮華には筒抜けだったらしい。この数ヶ月の無駄な緊

張感をかえして欲しい。

会場はホテルのホール、そこにいる人数は僅かに30人である。

「揃ったようですね、では試験を開始しましょう。席に座って下さい。」

どうやら試験官が入ってきたようである。

少な過ぎないか受ける人数？と頭をよぎったが、33億円はホイ用意できる奴はそうはいないなと思いなおす。

蓮華は自分の席にさっさと座ったため、自分も指定された席へと座る。

「解答用紙には席に置いてあるペンでお書き下さい。そうでないと点数にはなりませんので、お気をつけて下さい。試験時間は2時間です、では始めてください。」

机に置いてあるペンを持って問題に解きにかかる。

第一問

容器に入ってるクライグラストにスーベルジククの尻尾を混ぜるとどうなる？

- 1・爆発する。
- 2・クライグラストが尻尾を食べて大暴れする。
- 3・両方溶けて消える。

……………はあ？

クライグラストって何？尻尾を食べるってことは生物なのか？聞いたこともねえんだけど、全く分からねえ。

一問目は飛ばして二問目へいこう。

第2問

ハンバーグにテトロドトキシシンとクロロホルムを大量に混ぜて食べるとうなる。

1. 眠るように死ぬ。
2. 悶え苦しんで死ぬ。
3. 発狂して暴れまわって助かる。

ちょっと待て、いや今回は意味がわかるが、選択肢がおかしくな
いか？何でこんな問題がでるんだよ。

まあ多分、2

第3問

あなたはこのテストで何点くらいとれますか？

1. 10点
2. 40点
3. 90点

変わった問題だな、ん、多分1になる予感してる…1つと
この試験のせめて救いはマークシートだったてことか…

第7問

1. ? | \ < |
2. ? | |
3. ? | |

…ごめんなさい、読めません…シクシクシク。

読むことすらできない問題がくるとは、問題作った奴性格悪いだ
ろ！と心の中で愚痴りながら

3！ 神頼みしかねえ！

第18問

あなたは料理ができますか？

- 1 . YES
- 2 . NO
- 3 . 多少できる

もうコレ…問題じゃなく、アンケートだろ。 3

第20問

()の中にはどの言葉が入るでしょう？

このテストを全問正解した奴は()だと思う

- 1 . バカ
- 2 . ばか
- 3 . 馬鹿

どれも一緒や！どれでもいい。 1

試験はある意味サクサク進んでいった。

試験（後書き）

最後のが書きたかっただけでして・・・

誤字脱字（問題は誤字ではありません）、アドバイス、感想など
ありましたら、報告を・・・

鶴と籠（前書き）

区切りがいいところ、だと思ふ。自信ないけど…

小説お気に入りしてくれた方、ありがとうございます！作者は大喜びしています

（*、*）

鶴と龍

問題は全30問、2時間以内に一応全てうめた。

埋めただけほとんど正解はしてないと思う。読めない問題もあったくらいだし。

ホールを出ると悠斗の視線の先には、蓮華がこっちに向かって仁王立ちしていた。

「ユー君はどうでした？受かりそうですか？私は2次関数で少々手こずりましたが、ほぼ満点ですね。」

あん？…ちょっと待って、2次関数？そんな問題あったか？

数式なら『カメラを撮影するときの言葉は？』で選択肢の『1+1』くらいしかなかったぞ。

「蓮華、ちょっと聞いていいか？……問題全部読めた？」

「？？？ ユー君、どうしたんです？日本語わからなくなっただけですか？」

「だって問題に異国の言葉とかあっただろ？」

「・・・テストでの過剰なストレスで、ユー君が壊れかけてるみたいです。なら私が治してあげます！テストも終わったことですし、さあストレスを発散しに行きましょう！」

蓮華に腕を組まれて、引っ張られて行く俺。問題用紙は回収されてしまったし、証拠がない。

俺のテストはどうなっていたんだ……！！

その後、蓮華にさんざん振り回されているんな場所へ行き、最終的にはシヨッピング、もちろん荷物持ちなどして、蓮華とデート・いや臨時従者で付き従ってただけだな。

昨日の蓮華に振り回された疲れから、休日の今日は朝からベットの上でゴロゴロ〜ゴロゴロ〜。試験も終わったし、特にやることもないからね。

現在午前11時、流石にお腹が空いたのでベットから出る。

「母さん、朝飯は？」

「今さら起きてきてあると思うかい？そこにある食パンでも焼いて食いな。そういえば、あんた宛に魔法学院から封筒来てたから確認しときな。さてと…そろそろタイムセールの時間だし、出かけてくるわね。」

母さんは目にも留まらぬ早業で準備し、出かけていった。

家に残ってるのは自分だけ。親父はまた仕事でいない。母さんもたった今出ていった、兄貴は行方不明。

家でぽつんと佇む一人・・・さてと朝飯、朝飯つと。

遅めの朝食を食ってから、母さんが言っていた封筒を手にとる。

小橋悠斗様と書かれている郵便にはアルチ・キューリア魔法学院と書かれていた。

魔法学院、この地球側でその名前がつく学院は《天空島》にある学院だけである、昨日俺が試験を受けた学院でもある。

やっぱりテストに手違いでもあったのか？試験受けた後で俺は幻覚でも見てたのかと思っただけど…やっぱり何かの間違いだったん

だな。再試でもしてくれるのかな？

軽い気持ちで封筒を開けると…

中には黄色い折り紙が一枚入っていただけであった。

コレダケ！？（決して新種のキノコではない）

封筒の中に手を入れても、封筒をひっくり返して振っても、透かして見ても、黄色い折り紙以外は何も入っていない。

折り紙でもしてろってことですかい？魔法学院さんよ。

だが封筒から出した折り紙に再び触れると、音もなく浮き上がり、勝手に折れ曲がり折り鶴の姿となった。

『小橋悠斗様、合格おめでとunggざいます。貴方は魔法学院へいく権利を得ました。』

勝手に折り曲がってしゃべりやがった。折り鶴からどこか機械的な女性の声が響いてくる。

そういえば兄貴の時でもそうだったな。驚きはしたが、むしろあの解答で合格したほうが驚き。

しかし兄貴とき『龍』だったぞ！あの東洋でみる手と足が短く、胴体が長く蛇のような龍、超細かく鱗まで折られていた大作。

簡易な鶴と大作の龍、もうすでに差がありすぎませんか？

『貴方が入学するためには明後日の30日午前9時に〇〇にあるxの地下5階まできて下さい。一分でも遅れますと学院へに行けなくなりますのでお気をつけ下さい。』

はい？天空島って太平洋の空中に浮いてるんだよな、何で地下に集合？

『荷物は手ぶらでも構いません。全て天空島でも揃いますので、それでは30日に会えることを祈っております…』

折り鶴はそう言い終えると燃え上がり消し炭へと姿を変えた。

証拠隠滅のつもりか？一回しか場所を言わないって、あーメモメモ、覚えている内にどこかに書かないと…携帯どこだ？そういうえば俺の部屋で充電中だったな。ならメモ帳もしくは紙、紙はっど…紙を探しまわるが…

「……紙…かみ…イラナ…イカミ…、もしくはメモ…何処だ！何処にある！なぜこういう時に見つからない！」
もういい、さっきの封筒の裏だ。

ペンもしくは鉛筆、書ける物書ける物。書ける物どこだ！どこに隠したんだよ母さん！

あちこち探して最終的に目の前にあったってことありませんか？
まあそんなことはどうでもよくて。

「明後日の午前9時に〇〇の…地下5階。〇〇の…〇〇の…」
やべえ、探し歩いて忘れちゃったじゃねえか！
あーここまで出てきてるのに出てこない…どうしよう。

出発が明後日だから、最終的な結論は明日下見で地下5階のある建物を探す、これしかなかった。

「どうしたの？ユー君。そんなどうする、どうするって呟いて、ん？明後日？」

「どわあ！どっからわいて出てきた蓮華！」

「わいてって私、虫じゃないんだけど…玄関から普通に入って来た

よ、鍵あいてたし。ユー君昨日ので、どうせゴロゴロしてるだろう
と思つて、起こしに来ただけど…予想がはずれちゃた。それでさ
っきのは…」

「おい、もしかしてまた俺の部屋に《例の物》設置してないよな？」
「……………」

「よし！今日は徹底的に大掃除だな。蓮華はとつとと出てつてくれ。
ほら、帰つた帰つた。」

蓮華の背中を押し玄関へ

「えっ！……………ちよつと、ユー君？…そのお掃除手伝つちや駄目な
の？……………ねえ！駄目なの？」

蓮華を外へと追い出した後、鍵をしめ素早く郵便の封筒を回収し
適当に着替える。

封筒は自分の机の引き出しにしまい、大掃除を開始する。

コンセントはもちろんのこと、天井、鉛筆型、目覚まし改良とか
ハンガー、でてくるでてくる。いつ設置したんだあの娘は、あとで
説教してやらんと…

大量の例の物をもつて家を出ると、予想外に蓮華が家の前で大人
しく待っていた。俺の予想ではさっきのことで、騒いで家に帰つて
ると思つていたのだが…

「ユウ君。アレ意外に高いんだよ、私のお金で買つてるだから
1個だけでも置かせてよ」

蓮華がウルウルの上目遣いで、俺に懇願してくる。この表情はす
ごい破壊力がある、男である俺では正直肯きたくなるのだが、今回
は駄目。コレ何度目だよ。

「……………ダメ」

そうなんとか言って俺はお隣の家へと歩きだす、いつも通り俺の左側にピツタリついて歩いてくる蓮華。

まあさっきのだけで許す訳もなく、キツチリ蓮華の両親に説明して、説教して止めさせなければ！俺の安静のために…

「ザーツ…これ…今後…大丈夫だろう…まあ明後日には…出る…
んだけどさ…ザーザー」

「フフツ、明後日かあゝ楽しみ。」

「ん？…気のせいか…ザーツ…また神経質…色々不安だな…
ザーザー」

「フフフ…」

鶴と龍（後書き）

ちよつと伏線ぽく、終わらせてみました。次どうしよう…
誤字脱字ありましたら、報告を

剣士（前書き）

なぜか昨日出すものが一昨日の夜に出てしまっていました。完全な予想外です。

まあ今日のは、ただ書くのに時間がかかっただけなんですけどね。

剣士

俺は兄貴からの送られてきたナイフと、親父からお守りだと渡されたクナイと手裏剣数個、そして送られてきた天空島の住所を書いたメモ、あと非常食と水を鞆に入れ　まで一人でできていた。

なぜ一人で来たかは理由があつて、昨日までに蓮華に合格通知が届かなかったからである。頭の良い蓮華が不合格だとは思えないんだが、送られてこなかった物は仕方ないので一人で此処へくることとなった。

でもいつもの蓮華なら無理にでも付いてきそうだったんだが…やけにすんなり引き下がったのがちよつと気になっているのだが。

昨日も一度この辺りの建物を歩いて調べたが、地下5階までの建物は3ヶ所見つかった。これで安心だと思っていたんだが…

今日3ヶ所の地下5階へ行っても…何か特別変わったたりしている場所がない。

現在午前8時30分、後30分で見つけないと天空島への行く手段は消えてしまう。

朝早くから此処へきて、3つの建物を調べて行ったり来たり。

だあああー、あと30分しかない！

「おい、その君？」

こっちのほうの建物はもう何度も調べたし、あっちのほうは建物はさつき行ってきたから間違いはないはず、となるとこっち側か？

「なあ君。聞こえているのだから？」

「だあー、誰か知らないけど俺に話しかけないでくれよ、こっちは

時間がなくて焦ってんだよ！」

建物の柱に寄りかかり話しかけてくる男。

俺が困ってそうだから、話しかけてきた良い人なのかもしれないが…男は赤髪に紅の西洋の鎧を着ており、背中には背負っているのに地面につきそうなくらいデッカイ剣をを装備している。

日本でこんな格好をしているのはコスプレ野郎か、異世界側の人間。だが地毛の赤髪、つまり異世界側の人間。怪しさ満点の男でなければ良かったんだが…さっきから俺に頻繁に話し掛けてくる。

「それはすまなかった。だが小橋悠斗よ。早く行かないと不味いのではないか？」

「……………!!」

何故？俺の名前を知ってる？俺の名前を示す物ないし、見ただけじゃわからない。とっさに距離をとり構えてしまった。

「あんた今日の運勢最悪らしいよ。何が起こるか分かんないし念のため、水と非常食もってきな。何が起きてもいいように」

…って朝言ってたな。意外に的中しそうだな母親の言葉。

異世界人。あっち側の人間は原則天空島から出られない規則となっっているはず。

入試のときの試験管も赤髪の異世界人だったが、ちゃんとスーツを着てこちら側の服にあわせてはいた。

だがこの人物は堂々と鎧を装備している。

今日は散々探して手がかりが無いんだ、怪しい人物にしか見え

ない剣士にでも頼ってみるか。

なんせ俺の名前を知っていた、なんか厄介ごとに巻き込まれるかもしれないが手がかりは掴めるかも知れない。

「・・・誰だよ、あんた？」

「ほう。まあまああの反応で構えだな」

寄りかかっていた格好から、こちらに向かって歩きだし手を差し出す。

「俺はランスローだ。お前の兄、小橋優一に世話になった者だ。君が弟の小橋悠斗君で間違いないんだろ？」

疑わしい。もちろん握手なんてしない。兄貴関連するのは最近はなかったけど、魔物とか大抵物騒な物が出てくるし。

「・・・ランスロー。仮りにもそんな兄貴の知り合いが、なんでこんな所にいるんだ？」

「・・・ちよつとある所から面倒な情報を掴んでね。君は地下5階のある建物の場所を知りたいんだろ？魔法学院へ行くために。」

何者だこの人。俺が魔法学院の合格者でことも知っているのか？俺の個人情報どこまで出回ってんだ？

「ん？.....どうやら見つかってしまったみたいだ、小橋悠斗よ集合場所なら××だ。とつとと行くのだな。」

俺が言葉に出てこなかった場所、確かに聞いたことのある場所。場所を親切に教えてくれたようだ。だが聞き逃せない言葉もあった。

「何をしてる。早くいかんと時間に遅れるぞ。」
「あっ、おう。」

腕時計をみると後20分。荷物を持って××に向かって走る。するとすぐに後ろからは、爆音や狼の叫び声などが聞こえてきた。

残り10分、××の地下4階にはマップ書かれていない扉があった。扉を開けるとキーっとなり、その奥には地下へ行く螺旋階段があるだけ。

あとは1階分下りるだけ、間に合いそうだな。

時折蠟燭が壁についてるだけで、薄暗い階段を2段飛ばしながらおりる。

しかし薄暗い空間から先ほどの狼が出現してくる。

「さっきの奴！」

俺の行く手に立ち塞がる。そして知らせるかのように雄叫びをあげようとす。

「させるかよ！」

すぐに出せる所にしておいたお守りの手裏剣を手にとり、素早く狼の眉間に投げつける。狼は叫ぼうとしたところで俺の手裏剣が見事に眉間に命中し霧散して消えた。

「ここへきてか・・・あの剣士しくじったな。親父のお守り、早速使わないといけない状態なのかよ。」

階段を降りながら偶に出てくる狼を、完全に出てくる前に眉間に手裏剣を投げつけ絶命させる。

終点が見えてきた、階段の1番下の所には両開きの扉があるのがみえる。

階段を下りるスピードのまま扉を開け飛び込む。

そこはコンクリート剥き出しの壁で10畳ほどの部屋。その中央にスーツを着た大人二人と生徒が一人立っていた。

「思ってたより早く来たな、小橋悠斗君。まあそれでも予定時刻まで後5分だぞ」

入試の時いたスーツを着た赤毛の大人の女性が注意してきた。

「あつ、すいません。もつと早くくるつもりでっただんですが、ちょっと狼の魔物に襲われてまして…」

「魔物だと！大丈夫だったのか？」

俺の魔物という言葉に、赤髪の女性の横にいた金髪の男性が驚きの顔をうかべ、叫ぶようにこちらに問う。

「ええ、ランスローっていう大剣を持った人が助けくれましたから…」

「…君、何のことを言ってるんだ？」

「学院の人じゃないんですか？自分の名前や、この場所とかも知っていましたし。」

やっぱりあの野郎は学院側の人間じゃなかったか…しかし兄貴の関連人物とか名乗ってたしな、どうい関係なんだろう。

「この場所まで知っていただと！ちょっと待て…確認をとってみます。」

そう男性が言うと、女性は軽く頷く。

「……コチラ、生徒からの情報で地上に魔物と怪しい人物がいるらしい、みえるか？」

学院の男性は上を向きながら誰かと話しているみたいだ。

「ああ、了解した。」

男性は地上にいる誰かとの話を終えたようでこちらに振り向き。

「……地上には剣士などいないと連絡がきたが、ヴァンウルフがどこからか大量にわいているそうだ、君の姿も確認していないそうだが…君はどこからきたんだい？」

その時

ズツカアアアアンンン！

部屋のコンクリートの地面が僅かに振動し、上の階から大音量の衝突音が響きわたった。

剣士（後書き）

今回は時間がかかった割には少ない気が…

アルジージャ（前書き）

考えるとファンタジーより学園のような気がしてきたので、ジャンルを学園にしました。
やっとな空島行き。

アルジージャ

「うわええ、上で何が起こってるんだろ？」

話についていけない、もう一人男子生徒が振動に怯える。

まだ連続的に衝撃音が響き、振動が少しずつ大きくなる。

「何があった！B！紫！……チツ、やられたか、余裕がないか。まさかここまで大規模な襲撃してくるとは、相手の目的は何なんだ？ここになんの価値がある？」

男性は何かつぶやきながら考えこんでしまった。

「まさかな…だが可能性としてはあるか。アブレード、私はこの子たちとすぐここから離脱するわ。ここはしばらくは大丈夫だろうし、あたなたは前線の援護に向かってあげて。」

女性が指示をとばす。そうしてる間にも衝撃音が段々近づいてくる。

アブレードと呼ばれた黒いスーツを着た男性は

「わかりました。……つとと」

地面が振動してる中、何とかバランスをとりながら男性は部屋から出ていってしまう。

「小橋君、佐々乃坂君。ここは多少危険になるかもしれませんが、ですので今から島に急遽転移することになりました。いいですね？」

「はいいいー！」

「了解です。」

「では私の腕にしっかりと捕まってください。絶対に離さないでくださいね。」

俺たちは右と左に分かれ、スーツの女性の腕にしがみつく。

「そのまましっかりと捕まってるね。飛ぶよ、アルジージャ！」

女性が叫ぶと同時に地面に幾何学模様が現れ、青く光り輝く。

魔法陣！と思うと同時に浮遊感に包まれ、背景がノイズが入ったかのように一瞬ブレた。

次の瞬間、俺は周りが森の白い石でできた廃墟に一人で立っていた。さっきまで腕に捕まえていた女性ともう一人の生徒は目の前からいなくなっていた。

「？。」

背後から何か音色のような音が聞こえた。振り返ると廃墟の入口に小さな女の子が立っているのが見えた。

「、？」

さっきの音はやはり言葉であるみたいだが、よく分からない。聞いたことのない発音。

「え？何いつてるの？」

俺の言葉を聞いたことにより、何か核心したようで少女はニタア

「っつと笑みを浮かべたが、すぐさま普通の表情に戻った。

まずったかな、俺。

面倒な予感が少女から漂ってくる、少女が俺に何かしようとしているか…少女を注意深く観察しながら、少しずつ動く。

髪はショート的茶髪、目がクリクリと笑うと可愛いと思うが、今はその目が笑っていない。

ん？少女の後ろに、たまにヒョコヒョコと動く物体が見え隠れしている。

体を右に少しずらし、彼女の後ろを伺う。少女の後ろにはふさふさの渦巻いた大きな尻尾が存在していた。

尻尾！？

「ごふう、って聞こえそうなほどの衝撃が腹に走る。意識していなかった中途半端な態勢だったため、猛烈な衝撃に耐えられず、軽く吹っ飛び尻餅をついてしまった。

「ごほう、いつてえええな！何すんだよ」

尻尾に気をとられたのもあるが、少女が目の前にくるのを全く感知できなかった。

俺の腹にダメージを与えた目の前にいる犯人を睨む。

「コレで聞こえるようになったんちゃう？」

少女の言葉がすんなり頭に入ってくる。

「あっ本当だ。…って何したんだよ、お前。」

「頭突きに決まってるやないか。あんさんが馬鹿にした目で私を見るからや、久々に綺麗に決まったでえ」

馬鹿にした目って、ちよっと尻尾に驚いただけじゃないか…

「頭突きでこの威力は初めてだな…、じゃなくて！何で急に言葉が分かるようになったんだよ！」

「そんなん、翻訳魔法叩きこんだに決まってるやろ。言葉つうじんのはかなり面倒やん？ところであんさん、こんなとこでなんしとん？」

「翻訳、魔法、そうですか。えっと俺が今の何してたかといいますと…」

「ちよい待ち！」

少女はそう素早く言うと、左右を探るように見渡す。

「…ここ、囲まれてるぞ。」

その言葉に俺も周囲を伺うと、確かに微かだが何かいるような感じがする。

「何か嫌な感じやな」この感じは魔物か？なんで魔物がこんなに…あつ消えよった。」

俺にはよくわからなかったが、戦闘は回避されたようだ…

だが多少落ち着くと。今更だがさっきまでスーツの女性と生徒はどこか行ってしまったし、ここは何処かもさっぱり分からない。

この状況、不味いのでは？そして客観的にみると俺は迷子なのか？…この歳で迷子、精神にダメージが…

「あの〜いきなりですみませんが、助けてくれませんか?…ええつと……」

「ジョン・ケネディ。私の名前はジョン・ケネディや!あんたは?」

嘘くせえ。偽名にしか聞こえねえよ、その名前。そして間にFを入れると、いずれ暗殺されるかもしれんぞ。

「ああ、俺はゆう、いち…優一・佐々乃坂。あのケネディさん、俺を何処か…」

流石にとつさに思いついた偽名は少女には通じていないようで、お見通しな態度だったが、

「…ええで、そのかわり、ほれ」

俺に向けて右手を出してくる。なんか嫌な予感…

「カネや、カネ!誰かに頼むってことはカネが要るのはわかるよな?」

やっぱりな、でも俺にはここがどこだかさっぱり分からん土地なのが問題。どっちに何があるかもわからんし。俺が不利過ぎる、渋々立ち上がり財布から千円を取り出し渡す。

立ち上がると少女の身長は俺の胸くらいしかない。意外と小さいんだな。

「ああん?なんじゃ変な紙やんけ。銀とか金とか、ジャラジャラ宝石もつとらんのかい!お前、さつき来たばかり地球人の学生やる!ええい、ちよつとソレ貸せい!」

「えっ!」

いつの間にか俺の手から財布が消え、彼女の手には俺の財布が存在していた。

またしても彼女の動きは俺には見えなかった。

「おお、あるやないか！これは銅やな、おお！これは銀か？ちよつとくすんでるがいつぱいあるやんけ。」

彼女手には100円玉や1000円玉をウキウキした表情で取り出している。

だがその時、先ほどから周囲に意識を半分さいていた俺だったが、どうやら遠くからこちらに向かつてくるモノがいる。

少女もそれに気づいたのか、俺たちは同じ方向に構えて待つ。

そして近くからガサガサつと音がしたかと思うと、近くの茂みから赤髪のスーツの女性が飛び出してきた。

「よかった、無事で。小橋君、どこか怪我とかしてませんか？さきほどヴァンウルフを何体かいましたので…おや？貴女、リリーじゃないですか、こんなところで何しているんです？」

俺を転移してくれた女性、どうやら少女とは知り合いらしい。少女は女性をみるなり、さっきのウキウキ感などどっか吹っ飛んだように、今は逆にビクビクしている…

少しずつ後ずさりしながら、尻尾の毛を逆立て、身体をぶるぶると振るわせ、髪の中から上に耳が生えていた。

耳って髪で見えてなかったけどそんなところにあったんだ。今更だかりスの亜人さんって脳が認識した。

「ど、どどっ、どうしてマライヤが此処に！私は何もしてない！何もしてないからあああー………」

と叫びながら彼女は猛スピードで走りさってしまった。

「…怪しい過ぎる。小橋君、リリーに何かされませんでしたか？」

リリー、それが彼女の本当の名前なんだろうか。

「腹に…いえ、翻訳魔法をかけて貰ったくらいでその他は別に…」
「…翻訳だけならいいんですが。それより、危ない目にあわせてしまつて申し訳なかった。」

女性が深々と頭を下げる。

「離脱のための転移まで、まさか仕掛けられているとは思つてもおらず、安易に転移して危険な状態にしてしまった。本当に申し訳ない。」

「いえ、あの状況ならしょうがないですよ。結果的には俺は無事でしたし。ところでよく俺がここだとわかりましたね。」

女性が下げた頭をあげ

「ああそれはだな、見つけたのは転移の時、念のため君に目印を付けておいたからだ。自己紹介がまだだったなマライヤ・クルーセルだ、ライセンスは？、一応これでも学院の教員だ。何でも聞いてくれ。」

「教員！…オレツ、自分は小橋悠斗といいます。よ、よ、よろしくお願ひします。」

「そんな畏まる必要はない、てか好かん。行事以外は普通にしてくれ。さらに私は君を危険にさらしてしまったんだ、教員失格だ。だから君が困っていることがあれば、力を貸すつもりだ。ではまずは

換金所へ案内する。日本円はここでは使えないからな。」

換金所、確かに日本円は使えないよな。てかあのリリースって子に財布持つて行かれたあ！

アルジージャ（後書き）

戦闘があるようでない回でした、頭突きは戦闘に入りません。それに名前って難しいですね。意外とでてきませんね…
誤字脱字ありましたら報告を…

マライヤ（前書き）

はあ、時間が足りない。ってより考えてたことを、書こうとした瞬間、消えていってしまっ…なるべく消えない内に書いていますが、この現象により時間がもの、すごおおおしくかかってしまいました。

マライヤ

財布の件をマライヤさんに話すと、リリーめ余計なことしやがってとか、あの忌ま忌ましい学院長が全て悪いんだと呟いていた。

最終的には俺が資金が調達できるまで一人暮らしのマライヤさん家に世話になることになった。

「少し散らかってるが、遠慮せず入って、入って。」

「おっ、おじゃま、します…」

俺が緊張して入ると、目の前には…

きつったたねええええー！どう見てもゴミ屋敷じゃん。こんなところで生活してるのかこの人は…

ゴミ袋が置いてあるのはこの部屋ならスタンダードで、なぜに玄関にビールの缶やらフライパンがあんだよ！

つつか入ってっていわれても足の踏み場もないし、床がゴミで見えないし。少しとかの領域じゃないと思うなコレは。

何時までもほづけている訳にもいかず、覚悟して踏み分けて入る。

グチャ

うえ、何か踏んだ。ちょっとヌメってしたもの。確認しようにも色々落ちてて見えない。

どうせココで取ってもまた踏みそうだし、気になるけど！そのまま進む。

リビング当たりで、埋もれているがかるうじて使えそうな椅子に、マライヤさんが座って待っていた。

「その辺り自由に使っていていいから。布団とかないしソファで寝てもらえる?」

比較的ましのテーブル　もちろんレトルトとかカップ麺が山になって置きっぱなし　で今後についてついて話す。

「はい、ありがとうございます。」

その辺りと言うのはどの辺ですか?ソファなんて何処にあるんですか…とは言つと面倒なことになりそうなので、とりあえず了承しました。

「んで明日にはリリーから財布を手に入れれると思うから、場所は何とかなるとして。まあその前リリーとつちめるけど…。私が居ない間に何かあるといけないから、道具と小遣いあげとくわね。」

半月の銀貨が3枚と腕輪が俺の前に置かれる。

「腕輪には翻訳魔法が組込んでいるわ。普通の魔法は一日で切れるから、常時かかるようにするため腕輪は常にしてて。」

そして小橋君は日本人だったわね。この半月の銅貨一枚がほぼ1円の価値。半月銀貨Kが一枚が千円、んでここにはないけど100万円が半月金貨Mと違ってくれればいいわ。単位はC。^{シーク}

後は、このほぼ円形をしたのが1000の位、真ん中に穴があいたのが10位を表すから覚えておくように。質問はある?」

「いえ、特にないです。」

「それじゃあ、私はお風呂入るから、あそこの部屋は入ったら駄目。食料はあの棚にあるから好きなの食べちゃっていいから。」

そう言ってマライヤさんは自室らしきところへ入ってしまった。
さてソファアーってどこにあんだろ？しかし、よくこんなところで生
活ができるな。よし、いっちょやるか！

「あら？なんか部屋がさっぱりしたわね。」

「さっきは質問がないって言いましたが、一つデツカイのがありました。
した。何ですか！あのゴミ山は！」

「うっ、忙しくて暇がなかったのよ。別にそんなに溜まってなかつ
たでしょ。」

駄目だこの人、あの大量が少しにしか思っていない。まあそんな予
感はしていたんだが：服はその辺りに散らばってるし、食料はレト
ルト系しかないし、冷蔵庫はアルコールのみ。

外ではできる人物ように見えたが、私生活は駄目駄目な人物よう
だ。何かとお世話になる、いや、することになるだろう。

財布奪取やら、爆破実験、蓮華の携帯メール攻撃やらを経て、
なんとか無事に入學式当日を迎えた。当初部屋を見つけて一人暮ら
しをするつもりだったのだが：料理・洗濯・掃除をしていたら、マ
ライヤさんに気に入られてしまい、まだあの部屋で世話になったま
まである。

「皆の諸君。栄えある我が魔法学院によこそ！私がこの学院の長、
シュタイナーザ・グエンテスである。此処には地球人、アルテリア

人も分け隔てなく同じ学生だ。地球人とアルテリア人、多少の習慣や文化の違いから問題はあると思う。だが同じ魔法を学ぶ者どおし、切磋琢磨して行って欲しい。

改めて、歓迎する。ようこそ！アルチ・キューリア魔法学院へ！」

舞台の学院長は話を終え舞台袖に消えた。

何千人も入ってそうなホールで、後ろ列の隅の椅子に座り参加していた学院の始業式も、学院長の話を最後に終わった。

今からは俺も正式にアルチ・キューリア魔法学院の生徒となる。

地球に対して異世界はアルテリアという名の世界らしい。習慣や文化のせいかクラスには数名の地球人しかいない。

学力テストや運動能力測定、魔力検査などを行い、あつという間に2週間が過ぎた。

順調に新しい生活が始まっていたが、最後の魔力調査日に学院から急遽呼び出しを受けた。

何かトラブルでもあったのかな？と思いながら呼び出しの場所の職員室に入る。

「おう、来たな。」

入るとマライヤさんが迎えてくれた。

「ユート、お前は今から学院から自宅に帰ることを禁止する。」

・・・ついに人という概念からズレたか。

「何いきなり突拍子もないこと言ってますか！マライヤさん、それは職権乱用ですよ！俺に何の怨みがあるんです？飯作りませんよ。」

一瞬変な方向の思考に陥ったじゃないですか…

「いやいや、私が決めたことじゃないんだよ、コレは！それに飯は作ってくれないと私が死んでしまう！」

「じゃあどういう経緯であんな言葉ができたんですか？ついでに飯はカップ麺でも食ってればいいじゃないですか…」

「うう…学院の方針で毎年下位…違った、先生からの推薦で6人を選抜し、長期強化合宿する習わしなの。そのメンバーにユートが選ばれたってこと。まあ最後の一人が決まらなかったからユートを私が抜込んだいたんだけど…」

「何余計なことしてんですか！」

「だって私が合宿の責任者だし、学院長のせいで私まで合宿するはめになっちゃたし。そうなるって何かと知ってる人物がいたほうが楽…コミュニケーションがとりやすいじゃない。」

「今、楽とか言いませんでしたか？…まあマライヤさんのことですし、もう決定事項なんですよ？さらにマライヤさんが管理なんてしたら合宿所が酷いことになりますしね。んで合宿所というのはどこなんです？」

「場所はこの窓から見えるよ、あこあこ。」

マライヤさんが指差す先へ視線を向けると、そこは校舎の裏であり、そこにプレハブ小屋が一つ建っている。

「……………辞退させていただきます。辞退させて貰えないのであるならば、マライヤさんを訴えることにします。私は戦います！」

「訴えちゃ駄目、絶対駄目、そんなのに使えるお金は私にはない！ ……あっ、あこだって住めば都だって！ユートは一時期私がお金貸してあげたじゃん！その借りを今は行動で返してくれれば良いんだよ。」

「その借りたお金は利子までつけて、もう返したはずですよ。」

「うっ、そうだった。…お願いします、おねげえします、どうか受けてくれませんか？…私の…私の給料が…。これ以上減俸は…」

何度も何度も目の前で土下座で懇願され、確かにマライヤさんには少し恩義もあるし、俺が折れることにした。

だがこの選択で、天空島での生活をガラリと変えることとなった。

マライヤ（後書き）

部屋の床が見えない人っていますよね？いつもどっやって生活してんだろと思うんですが…

誤字脱字ありましたら報告を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8718x/>

M.I.S.s. ~ 魔法バカの六人 ~

2011年11月13日11時49分発行